

<p>令和元年 9月27日</p>	<h1>病害虫発生予報</h1> <h2>10月号</h2>	<p>茨城県病害虫防除所 茨城県植物防疫協会</p>
-----------------------	--------------------------------	--------------------------------

**イネ縞葉枯病対策のため、水稻の収穫後はすみやかに耕起し、
ひこばえ(再生稲)をすき込みましょう！**


< 目 次 >

I. 今月の予報	
【注意すべき病害虫】	
イチゴ：ハダニ類	1
【その他の病害虫】	
ナシ，ブドウ，イチゴ，促成トマト，秋冬ハクサイ，冬レタス，秋冬ネギ，共通害虫	2
【防除所レポート】	
本田におけるイネ縞葉枯病の発生状況と防除対策（令和元年）	3
令和元年の水稻における主要病害虫の発生経過と次作に向けた対応	4
II. 今月の気象予報	
	6

最新の農薬登録内容は、(独)農林水産消費安全技術センターホームページの「農薬登録情報提供システム」(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm)で確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。
茨城県病害虫防除所 Tel :0299-45-8200
予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。
ホームページアドレス <http://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/>
フェロモントラップデータ随時更新中

<HP QR コード>



I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

イチゴ

1. ハダニ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 9月下旬現在、寄生葉率（本年値 3.0%，平年値 3.0%）、発生地点率（本年値 33%，平年値 25%）ともに平年並～やや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① ハダニ類は増殖が速いので、発生の少ないうちに防除を徹底する。特にビニール被覆後はハウス内が増殖に適した環境になるので注意する。
- ② 薬剤は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に散布する。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。なお、薬剤散布は、古い下葉を除去してから行うと効果的である。
- ③ ミツバチや天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
ナシ	黒星病	発生量：－	9月下旬現在，葉における発生は平年並である。落葉前の秋季防除を徹底する。
ブドウ	べと病	発生量：－	9月下旬現在，平年並～やや多い発生である。落葉前の秋季防除を徹底する。罹病葉は翌年の伝染源となるので，落葉を適切に処理する。
イチゴ	うどんこ病	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。
	炭疽病		
トマト 促成	黄化葉巻病	発生量：－	9月上旬現在，抑制トマトの一部圃場で発生がみられる。促成トマトにおいて，タバコナジラミの侵入防止，発病株の抜き取り等，防除対策を徹底する。
ハクサイ 秋冬	軟腐病	発生量：多い	9月下旬現在，平年より多い発生である。台風等の強風を伴う降雨の後は防除を徹底する。
冬レタス	菌核病	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。
秋冬ネギ	ネギアザミウマ	発生量：やや多い	9月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
	ネギハモグリバエ	発生量：やや少ない	9月下旬現在，平年よりやや少ない発生であるが，従来よりも食害量が多い別系統が発生しているので注意する。
共通害虫	オオタバコガ	発生量：やや少ない	9月下旬現在，直近1か月間のフェロモントラップへの総誘殺数は筑西市では平年並だが，土浦市および龍ヶ崎市では平年より少ない。
	ハスモンヨトウ	発生量：やや少ない	9月下旬現在，直近1か月間のフェロモントラップへの総誘殺数は，平年よりやや少ない～少ない。

本田におけるイネ縞葉枯病の発生状況と防除対策（令和元年）

県内 57 地点の水田において、水稻のイネ縞葉枯病の発生状況（8 月上旬）を調査したところ、発生地域の拡大傾向が認められました。現在、発生の目立たない地域でも、速やかにひこばえ（再生稲）をすき込むとともに、冬季の畦畔等の除草に努め、ウイルスを保毒したヒメトビウンカの越冬量を減らしましょう。

【病害の特徴】

ヒメトビウンカが媒介するウイルス病である。水稻は、イネ縞葉枯ウイルスを保毒したヒメトビウンカに吸汁されるとウイルスに感染・発病する。ヒメトビウンカの幼虫はイネ科雑草で越冬し、4 月上旬頃に羽化して麦畑へ移動、増殖した後、6 月上中旬頃に成虫が本田に飛来する。

【本年の発生状況】

- ① 地域別の発病株率は、県西地域が県内で最も高い値であり、次いで、県南，県央，県北の順に高く、鹿行地域では発生が認められなかった（表 1）。
- ② 県北・県央地域は、発病株率・発生地点率ともに、本年を含む過去 11 年中で 1 位であり、発生の増加・拡大傾向が認められた（表 1，図 1）。

【次作に向けた防除対策】

- ① ひこばえは、ヒメトビウンカの増殖・越冬場所となる他、ひこばえが発病株である場合、ヒメトビウンカの保毒虫率上昇の原因となるため、収穫後は速やかに耕起する。
- ② 畦畔，土手等のイネ科雑草は、ヒメトビウンカの越冬場所となるため、除草に努める。
- ③ 発生の多かった地域では、育苗箱施用剤を使用するとともに、本田防除の実施を検討する。
- ④ 縞葉枯病抵抗性品種の導入を検討する。

表1 本田におけるイネ縞葉枯病の発病株率(8月上旬)

地域(地点数)	発病株率(%)					R1の順位 ¹⁾
	H27	H28	H29	H30	R1	
県北 (8)	0.5	0	0	0.5	3.5	1
県央 (15)	1.3	0	1.1	2.7	4.3	1
鹿行 (6)	0	0.7	1.3	0	0	3-11
県南 (19)	3.2	2.5	7.8	6.7	4.6	3
県西 (9)	19.1	12.9	26.7	30.7	36.9	1

1) 本年を含む過去11年間における本年値の順位（3-11は3位から11位が同じ値であることを表す）

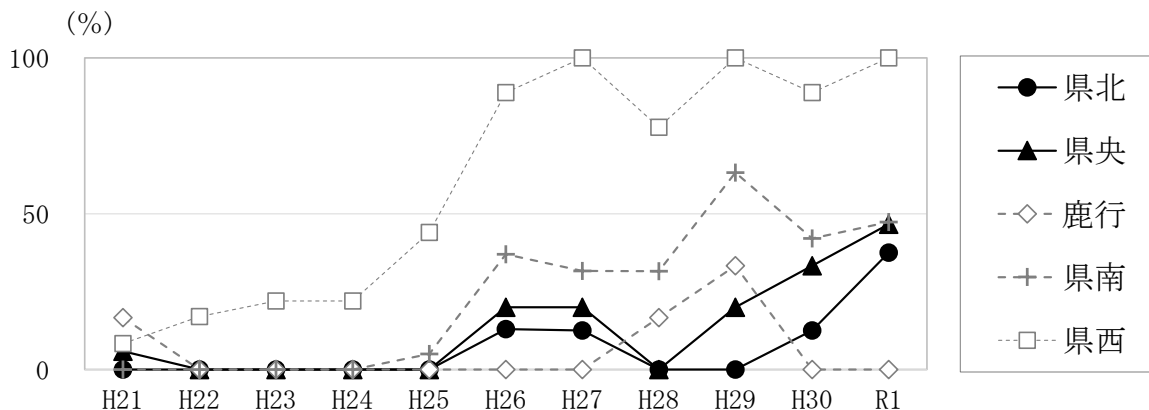


図1 本田におけるイネ縞葉枯病の発生地点率（8月上旬）の推移

令和元年の水稲における主要病害虫の発生経過と次作に向けた対応

県内の調査圃場（57 圃場）等の調査結果をもとに、本年の水稲における主要病害虫の発生経過と次作に向けた対応についてまとめましたので、参考にしてください。

1. 紋枯病

前年の被害株や畦畔等の罹病雑草に形成された菌核で越冬し、伝染源となる。菌核は代かき時に水面に浮上し、株元に漂着する。気温が上昇し、株間の湿度が高くなると、菌核から発芽した菌糸が伸長して葉鞘内に侵入し始め、楕円形病斑をつくる。

[本年の発生経過]

7 月下旬に発生を確認した後、昨年度発生が多かったことや梅雨明け後の気温が平年より高く推移したことなどから、8 月上旬には県内の広い範囲で発生が認められ、平年よりやや多い発生であった（図 1, 2）。

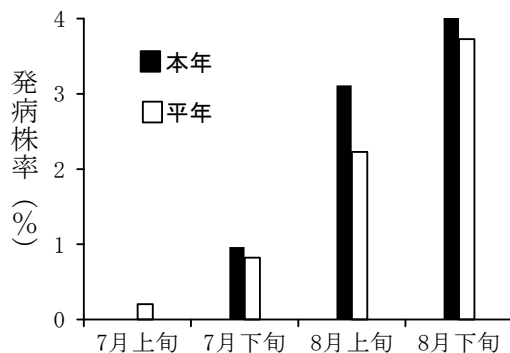


図 1 令和元年の紋枯病の発病株率の推移

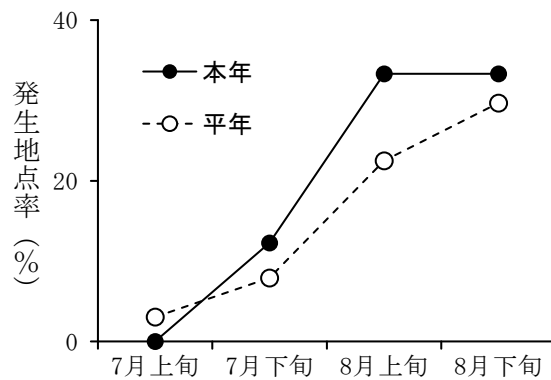


図 2 令和元年の紋枯病の発生地点率の推移

[次作に向けた対応]

- ① 代かき時の浮遊物に菌核が混入しているので、畦畔沿いにたまったごみを取り除く。
- ② 常発地では育苗箱施用剤を使用する。
- ③ 窒素肥料の多用を避け、過繁茂にならないようにする。

2. いもち病

前年の籾や被害わらで越冬して伝染源となり、低温・日照不足・多湿等の気象条件で発生が助長される病害である。葉いもちは例年梅雨入り後の 6 月下旬から発生し始め、7 月に最も発生が多くなる。その後、出穂期頃に降雨が続くと、穂いもちが多くなる。

[本年の発生経過]

葉いもち感染好適条件（BLASTAM*による）は、6 月下旬及び7 月中下旬に県下全域で出現したが、梅雨明け後の気温が平年より高く推移したことなどから、8 月上旬の葉いもちの発生は平年並であった。9 月上旬の穂いもちの発生は、県全体では平年並であったが、県南・県西地域では平年よりやや多い発生であった。

※BLASTAM（ブラスタム）：気象条件から葉いもちの感染好適日を判定するプログラム。

[次作に向けた対応]

- ① 種子は必ず更新し、未消毒の種子を使用する場合は種子消毒を行う。
- ② 常発地では育苗箱施用剤を使用する。

3. 斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシ等）

成虫は、水稻の出穂前は畦畔や周辺のイネ科雑草地に生息する。出穂とともに水田に侵入し、穂を加害しながら葉や穂に産卵する。孵化した幼虫も同様に収穫期まで穂を加害する。本県の主な発生種はクモヘリカメムシである。

[本年の発生経過]

- ① 水田内における発生は7月上旬までは平年並で、7月下旬に平年よりやや多くなった。8月上旬は平年よりやや少ない発生に留まったが、8月下旬には平年より多い発生となった（図3）。
- ② 7月下旬調査では、イネカメムシの発生は県南地域のみであったが、8月下旬には県央・鹿行・県西地域でも発生が見られた（図4）。

[次作における対応]

- ① 水田内外のイネ科雑草の除草に努める。ただし、水田周辺の除草は水稻の出穂期近くになってから行くと、斑点米カメムシ類を水田内へ追い込むことになるので、出穂期2週間前までに終わらせる。
- ② 水田内で出穂期に成虫を認めた場合は、直ちに成虫を対象とした防除を実施する。
- ③ 幼虫を対象とした防除適期は出穂10～15日後頃（乳熟期）である。

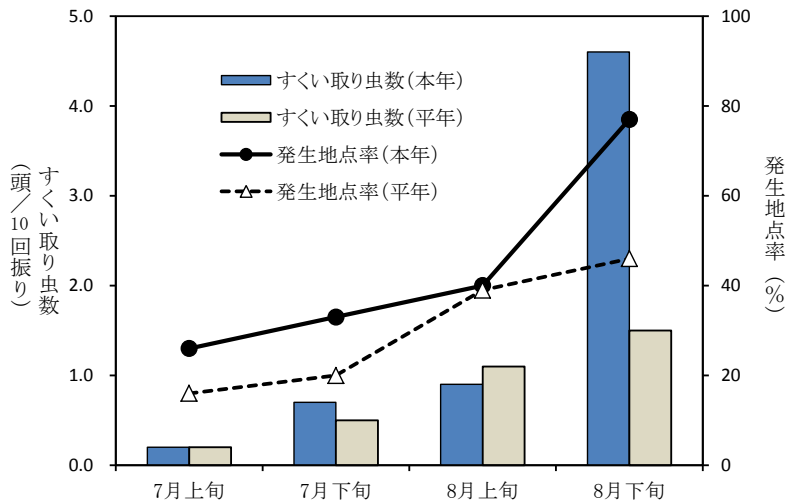


図3 水田内における斑点米カメムシ類捕獲数の推移

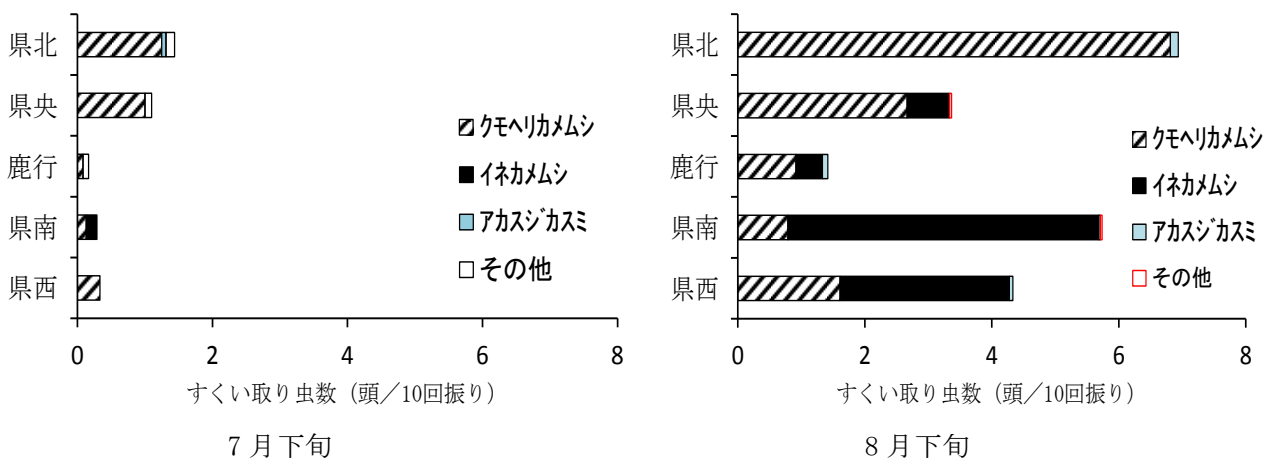


図4 水田内における斑点米カメムシ類の時期別種構成

II. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 9月28日から10月27日)

気象庁(9月26日発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]	要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
	気温	関東甲信全域	10	20	70
	降水量	関東甲信全域	30	30	40
	日照時間	関東甲信全域	40	30	30

[概要]

期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。
天気は数日の周期で変わるでしょう。

<1週目の予報> 9月28日(土曜日)から10月4日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率80%

<2週目の予報> 10月5日(土曜日)から10月11日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率50%

<3週目から4週目の予報> 10月12日(土曜日)から10月25日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率50%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類^{*}(FRACコード、IRACコード)の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。
※作用機構分類については、病害虫発生予報5月号(平成31年4月25日発表)の防除所レポート参照
- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。